

平成30年 **2**月の大阪森林便り



今月の木の話

木材は熱しにくく冷めにくい

- ・木材には熱伝導率が低いという性質があり、木の床は保温性があって足が冷えません。
- ・木材はすの成分自体が熱を伝えづらい上に、空気を多く含んだ構造となっているため、急に熱くなったり冷たくなったりしないのです。
- ・杉は水の5分の1の熱伝導率です。
- ・保温性が良いという性質は、手触り、肌触りがよいという心理的・生理的な方面からみた木材の特質につながります。
- ・木材は細胞の集合体である有機質なので、内部も表面も軟らかく、温かみに富んだ手触りが得られるのです。

(日本林業調査会「木材に強くなる本」より抜粋)



奈良産杉丸太 中国に 住友林業が初輸出

林道整備で生産増

- ・住友林業は、奈良県産丸太の輸出を本格化します。2017年11月に初輸出。十津川村の樹齢50～60年の杉丸太を中国に供給。すでに京都府産や和歌山県産なども輸出。
- ・中国ではフェンスや敷板、家具や産業用パレットなどに使われます。
- ・十津川村の原木生産量は、2017年度は前年度比29%増の22,000M3と6年連続で増加する見通し。韓国、台湾などへの輸出も検討します。

(2018年1月11日 日本経済新聞記事から抜粋引用)





北米産丸太、値上げ続く 6カ月連続 半年で2割上昇

- ・北米産丸太の2018年1月積みが対日輸出価格上昇。2017年12月に比べて3%高くなりました。値上げは6カ月連続。
 - ・米国は人口増に伴う住宅の需要増のほか、ハリケーンや山火事からの復興需要も重なり製材の消費が伸びています。輸入価格の先高観は強くなっています。
- (2018年1月12日 日本経済新聞記事から抜粋引用)



吉野材ブランド化へ輸出探る 奈良県

- ・奈良県の原木生産量は1980年代後半に50万M³前後ありましたが、輸入材との競争などで2016年は17.8万M³に減りました。
 - ・奈良県は吉野材のブランド化に向けて輸出を目指します。
- ※吉野材：奈良県中部の川上村、東吉野村、黒滝村の周辺で産出される高級杉。苗木を高い密度で植えて互いに競争して成長させる伝統的手法の植林で育てます。

日光を求めてまっすぐ伸びる木を選び定期的に除伐や間伐、枝打ちをし、節がなく緻密な年輪の木をつくります。江戸期に酒樽用の需要が伸び、昭和時代から本格的に住宅に使うようになりました。

(2018年1月19日 日本経済新聞記事から抜粋引用)



木材輸出、40年ぶり高水準 2016年から3割以上伸び 320億円前後 アジア需要取り込む

- ・日本産木材の2017年の輸出額が40年ぶりの高水準。中国を中心にアジアの需要が増え、320億円前後と2016年から3割以上伸びた模様。
- ・1～11月の輸出額は前年同期比37%増の292億円。12月予測を含めると国内の木材生産額の約1割に当たります。
- ・国別で輸出額が最も多いのは4割を占める中国。杉を中心に丸太の需要が旺盛。パレットや敷板、家電製品などの梱包材用途に使うといます。
- ・健康志向が高まる韓国向けに、香りの強い桧も人気です。
- ・米国も住宅フェンス用の杉製品の出荷が伸びているといます。

中国で構造材利用可能に 国産のスギなど

- ・中国で8月から、日本のスギなどが住宅の柱や梁といった構造材として使えるようになります。中国の建築法規が改正されます。
- ・使用が認められるのは杉、桧、カラマツの3種類。

(2018年1月23日 日本経済新聞記事から抜粋引用)